

# 利尻の医療

〇 3

## 島で産みた

「オギャー、オギャー」。台風崩れの低気圧の影響で、島からの船も飛行機も止まった。十月十三日午後五時三十五分、利尻富士町母子健康センターに元気な泣き声が響き渡った。

体重三千四百十の健康な赤ちゃん。「おめでどう、女の子ですよ」。立ち会った札幌大産婦人科教室の小泉基生医局長(三三)、島のベテラン助産婦、左達綾子さん(三三)が、母親の木戸真由美さん(三三)に優しく声をかける。

駆けつけた真由美さんの父親、大橋信司さん(五〇)は「タクシー運転手は「なんぼまでいいわえ」と、孫の誕生に目を細めた。

利尻島の出生数は年間六百人前後だが、今年同センターで産まれた赤ちゃんは、これで八人目。例年の年間二、三十人より少ない年になりそうだ。島に産婦人科医が常駐していないため、大半は稚内などに出向いて出産している。



産婦人科医や助産婦に囲まれて、女兒の出産を喜ぶ木戸真由美さん。13日午後6時30分

# 分娩に異常あれば隣町へ

## 2町が共同して産科新設目指す

島国保中央病院は札幌大産婦人科教室から医師派遣を受け、婦人科を毎月二回、各三日間ずつ開設。大学側は一人で分娩(ぶんべん)や手術をこなせる中堅医師を送り、母子健康センターの面倒も見ています。

木戸さんは、産婦人科医が島にいる間に出産できるよう、あらかじめスケジュールを組んでもらった数少ないケースだ。礼文町在住で、利尻島に里帰りして三度目の出産。「先生がいてくれるのは、とても心強い」と、出産直後の疲れも感じさせずに笑顔を見せた。

母子健康センターは医療施設ではないので、分娩中、出血などの異常で手術が必要になった場合は、車で十五分かかる隣町の島国保中央病院で治療しなければならぬ。帝王切開が行われると、母親は島国保中央病院、子供は母子健康センターに分かれ、別



島で唯一の分娩施設、利尻富士町母子健康センター

「お産のときは何が起きるか分からない。母子が寝起きを共にできないのは問題」と小泉医局長は指摘する。

五年前から島でただ一人の助産婦となった左達さんの後継者

待をかける。利尻町も「今、助産婦確保に全力を尽くしている。札幌にも協力をお願いして、ぜひ実現させたい」(糸谷克明町長と意欲的だ。ほぼ同規模の島内一町は對抗意識が強く、公共施設をめぐってはいつも「おらがまちに動き出している。

探しても課題だ。戦後間もなく、旭川から利尻島に移って五十年近く。これまで三千人以上のお産を手伝ってきた。「年なのになかなかやめさせてくれない。早く若い助産婦さんが来てくれれば」と願っている。

こうした中で、老朽化した母子健康センターを利尻富士町から利尻町の島国保中央病院に統合、将来は産科新設を目指す動きが広がっている。

利尻富士町は「島国保中央病院に施設整備して、安心して分娩できるようにしてもらえれば」(石川秀助町長と期

この連載企画に感想やご意見をお寄せください。〒住所、名前、年齢、職業、電話番号をお書きのうえ、ファクス011-210-5607か郵便で〒060-91 札幌市中央区大通西三、北海道新聞生活部「利尻の医療」係へ。